特54
32

大坂 **大字五行義考夫本**

今般新刻之儀は紙仕立にて摺上候ゆえ袋に入候ては嵩ばり重く不便に存じ候ゆえ袋に入れず紙に包み表紙に題名を書付候

右は摺上仕立にて懐中かさばれ一寸ほど宿安しかつ袋入の費なく又袋に入れず一冊十銭

きさらぎ 文句入 **淨瑠璃ぞめき逸**

是は右同様の仕立にて一冊十銭

淨留璃 文句入 **撥ぞめき逸**

是は中おあれば一段一冊にて出し文句と合せ絵ヲ入れ仕立て絵ヲ絵にして懐中便利の本

繪入義太夫

是は中おあれば一段一冊にて出し文句と合せ絵ヲ入れ仕立て絵ヲ絵にして懐中便利の本

端唄ぞめき逸

是は右同様の仕立にて一冊

常磐津稽古本

右は上写仕立にて文句の長き処おくりを下にて摺ぬき出しあれば便利の珍玩あり

きさらぎ 文句 **一下口淨瑠璃** 一ヶ月五もんめ

此本は義太夫清元長唄常磐津岸沢のさらい文句とあるの懐中ユエ酒の肴にあるべく新本調ヒ入れ右は上写仕立にて文句の長き処おくりを下にて摺ぬき出しあれば便利の珍玩あり

きさらぎ 文句 **淨瑠璃大全**

右は上写仕立にて文句の長き処おくりを下にて摺ぬき出しあれば便利の珍玩あり

刑治同字引 **罪法** 片カナ付 定價廿五銭 日 三十銭 日 十銭

此書は先般伝馬町牢屋敷の刑法治罪法を解し安き様に仮名を以テ活刷せしものなれば初学者にも速に解し易き書なり

徳山純先生編著 **農家作法用文**

此書は徳山先生農家日用往復書簡を解し易く且便利なる用文を耕作家に適用せしめ其体裁を画図に入れ編輯せし良書なり

十八史畧 全七冊 右は史記より十八史畧の誤謬を正せし書なり

四 **書** 後藤點 十冊 日希

五 **經** 日 十一冊 日希

春秋左氏傳校本 十五冊 日希

此本は長谷川大先生校定なり

算法新書 大中小本

此本は算法の数多しと雖ども他の比べき書籍なし

算盤通書 全

此書は先年有徳の学者にて新発明の算盤を考出し其法を解し易き様に図を以て説明せり

鼇頭改正 **明治文証大全**

此書は先年有徳の学者にて新発明の算盤を考出し其法を解し易き様に図を以て説明せり

やみみち
煩悩の暗みち
高橋年隆意匠并畫

善惡勝栗毛卷之三

第七驛

酒惡御道上乃宿○凡男如こも此酒惡に入るものハ。
若年をひきいぐ子こゝ心とく猶にして。それ惡の
の妹と夫婦。酒より惡しきものハ。されど當國
乃人も。辭ふく禮をもれごとも酒のうへ乱とゆ。
人もこゝのめぞ。金銀貨幣を失ひ。器物をうち
ぐれ。或ハ本性を失ひ。無にまつ。く間おつ。と
羽し。ゆくゆく遂ハ過去を吐き。喧嘩

口論をしまいぞ。底を蒙かる人をおや酒をのるあれぞな。なまら先く是を酒の肴り托つけ。ららみ悔む色者。生辞者性連へぞと云ふて面目を失ふ

ぞな船ぞな物ぞもぬ土地風なり○さべて南國の道を左へ初ぞり〳〵坐曲まる石ようて。土俗ハひぐり

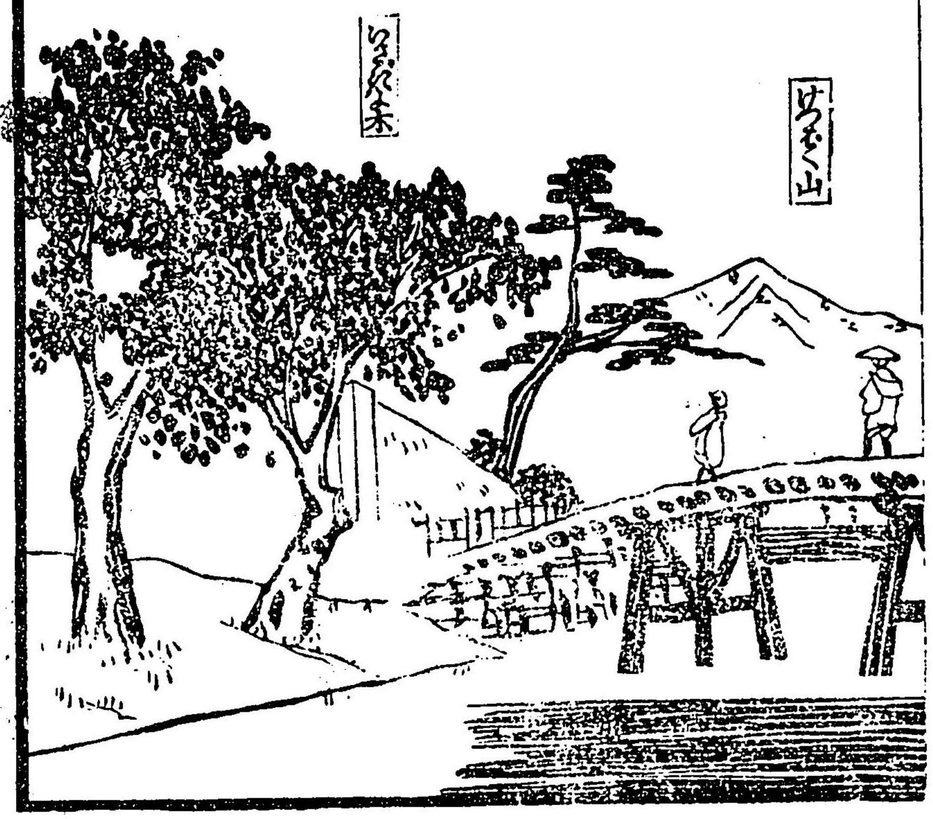
ぞとのみ言ふものなり○不石と以へぞな呑ふへば酒量堂る坂石より。陸くと深入して。ようひ上石。

法上戸。ぞら立上石。なぞ結ぞ村を志死者狂ぞ

かくぬ。福と貧の分所あり○以ぞ本よりあり○

漢白山○欲の焼。この石ぞ岐道りて○岩開道へ。倹約者〳〵悪御石ぞ恪嗇者へいづるなり。此二ぞ入口を能く似たる道りて。ぞのうとあるひ

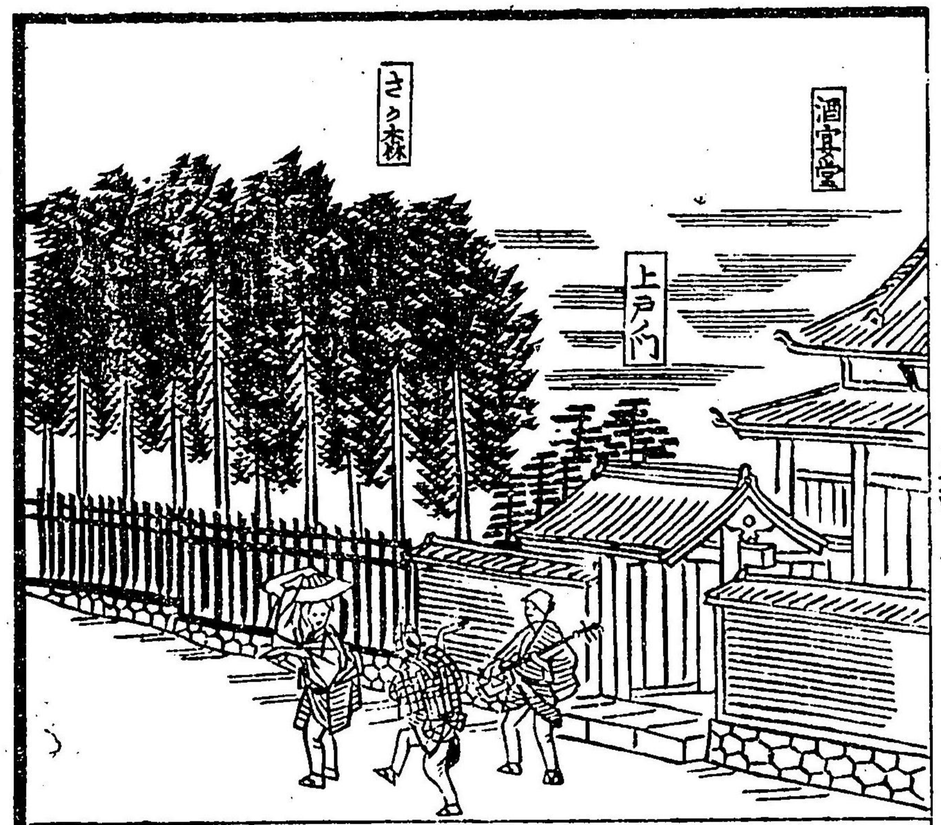
達つる中ゝ稽る者。雖
思維しく通行ぶべし
○凡此煩素領檢約の
道を第事つゞまるに
しく。費とさぶべき
衣食を養しと。
法ひとり非常の備へを
怠し祝類稼者の貪



戒の一戒。のむ事一升の
德利あるべゝ。猪口と平
とさんまとの。家ひゆゝ
事れく元の多く。古
數歩火宅こ出る芳際の
性味ある。下戸ゝ知ね
無矢の味ひ。さまのまし
のめば活機嫌なるべと

尾を垂し跪ち居き尾を長く尾を垂るの。こは生まれつき尾の永くと延び上りの癖なるべく。酒狂酒乱の人とあるめ極悪屋の入りとの行り。怒り猫しむじき大難不と覚悟して通りしなく。

宿の取法き○上石門と云ふあり。古の門表より東年中明ぎ居しなり。何等ふことなしいふ八幡門の古ゆなり○さこの牡○酒宴屋行りこの酒宴屋よりさの表一遠入しなり。方角とはそを出るみちを失ひ。かくく人古塚歩しと云ふ。作紙の國八幡の八幡ばらびの表も。此辺ひなるべしと呼ぶ○猪養村あり。当村ちみ古野良氏の孫新りと云ふ○亀嶋養の沈。この沈を土俗庵ぬ古沈ッけ出もいふ。その



あるべからざる○峯垣
林檎○茂八○一本○
三ツ井○おまつり○コイヅク
ちのごとくいつもあり。さいの巻
酒林りまつりの実なり。
なる。色いろて来し。
出来るのい魔接沈へ蔵
て○跡痛神巻石のふる

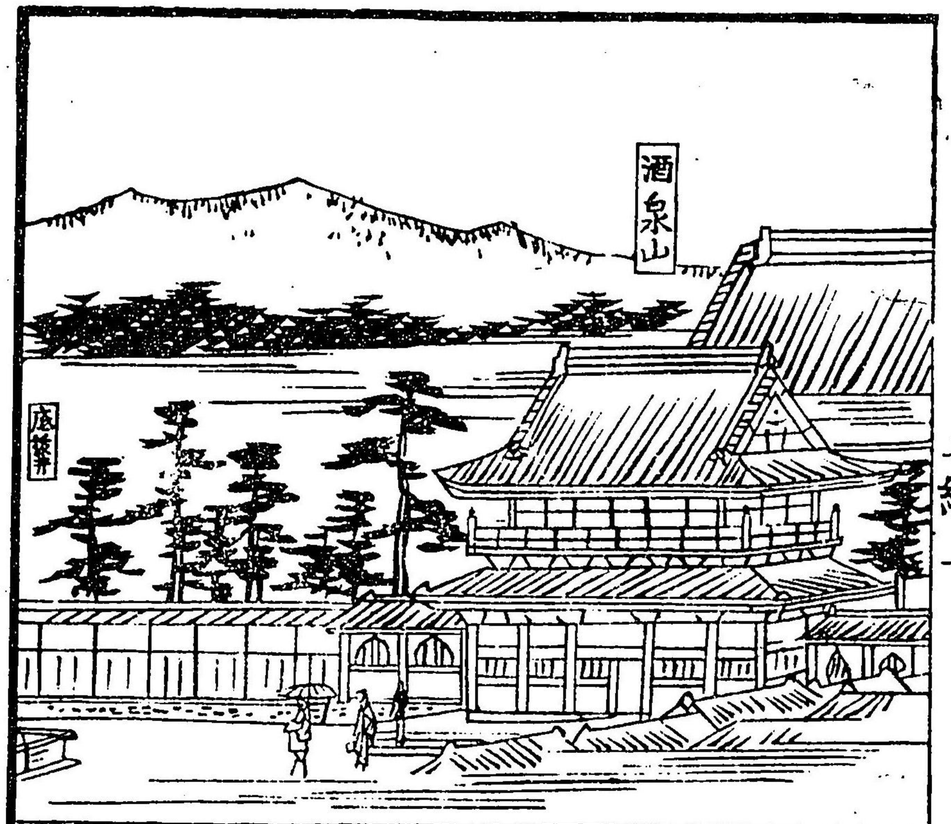
ちに生ぜ○二回碎ちちい〜恢此者奥地ゆく
出人の旅猪色者くゑ苦しき所あり○名物。水雜
炊○玉ゐざ歩○湯豆腐市と所ゆ極熟
烟りくひろる所なり○宣ッ原に。酒毒の木あり。
人くちゆくく加減者し。酒毒
の木ゆ実者る中。出給者ゑ紙ハ行の結翌日ち桃
結あゞぬ雑所なり○吐血村○内村。苦いゆ列ゆ
藤村りくゑひ幸なし。此原より左へ往く○贄源

檜をわかす○釜屋堀あり。大乃屋釜職人多く住
む〻の名あり○春日釜○拝び寺釜。まど造る土瓶
と呼○たるみ梨子畑を過ぐ○附合橋より○向ふ水
行滅しを戦〻海鷺り先ぶく形り○兵兵ごのさ江○
知らぬく松乃名所あり○久宝寺の渡舟より
巻舟多く出る。渡を渡く渡永りて此渡より出るゆ。
其土人ちぐを渡くゆ〻○ろろい鮭の魚多
し。この辺玲瓏河つゝみのぼりそるをまるあり○又

此の河に○大輕あり○
二見ご浦○清岩八苔一
面ゆ生じてぬらく
ちゝ色ばかり○俱羅利
岩ち浪こゆる色を動
ハ、ちかり。此二岩ゴ七五三
と張りてあり。朝の
景色むよく名所ぢり

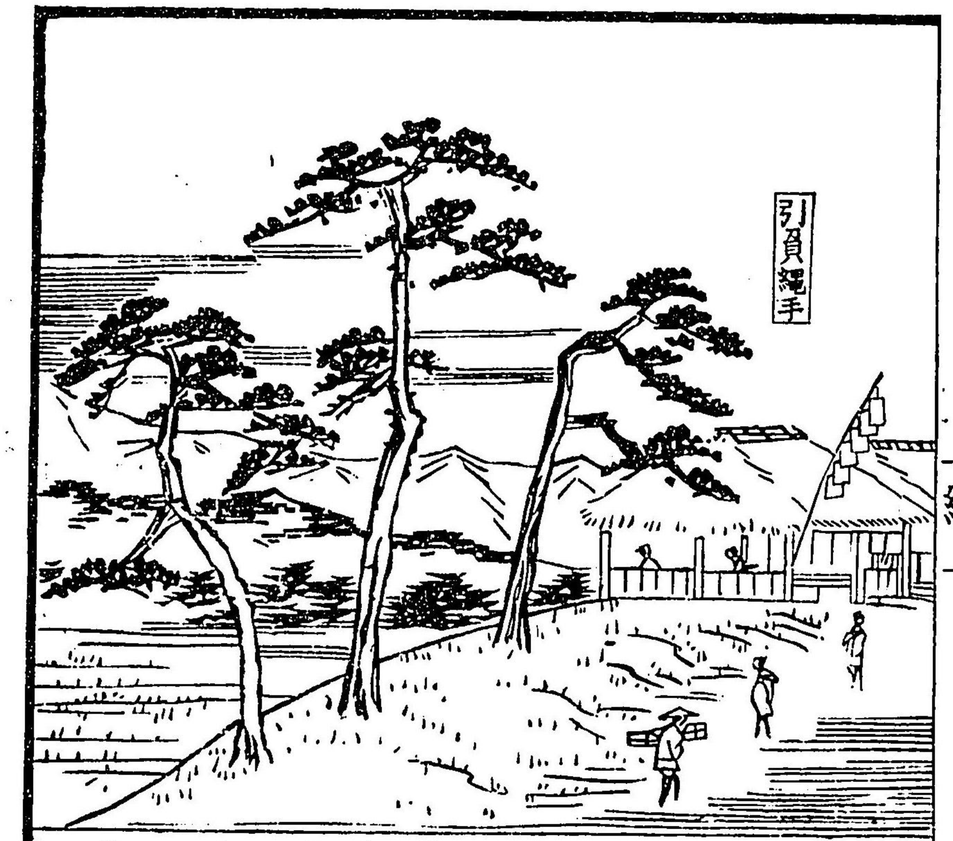
能なるし。伊勢の國に岡寺あり生駒より○酒泉山洗硯寺○當寺も繼の帝乃草創なり。地内より宋寺多く燒討宋酒壺〜○宋寺は倭大酒洗硯の形容なり○ぜんぶ六の孫陀へ長谷

吉光の建立○昔年の古寺に○六重の塔あり高十丈。第一階〜ゴ所経堂七安置仏○各ぬく摸若○動くい摸者○大きな摸者○附合い摸若。ぶだなり○第六階図の頂上ぬ。女房大変の号像七

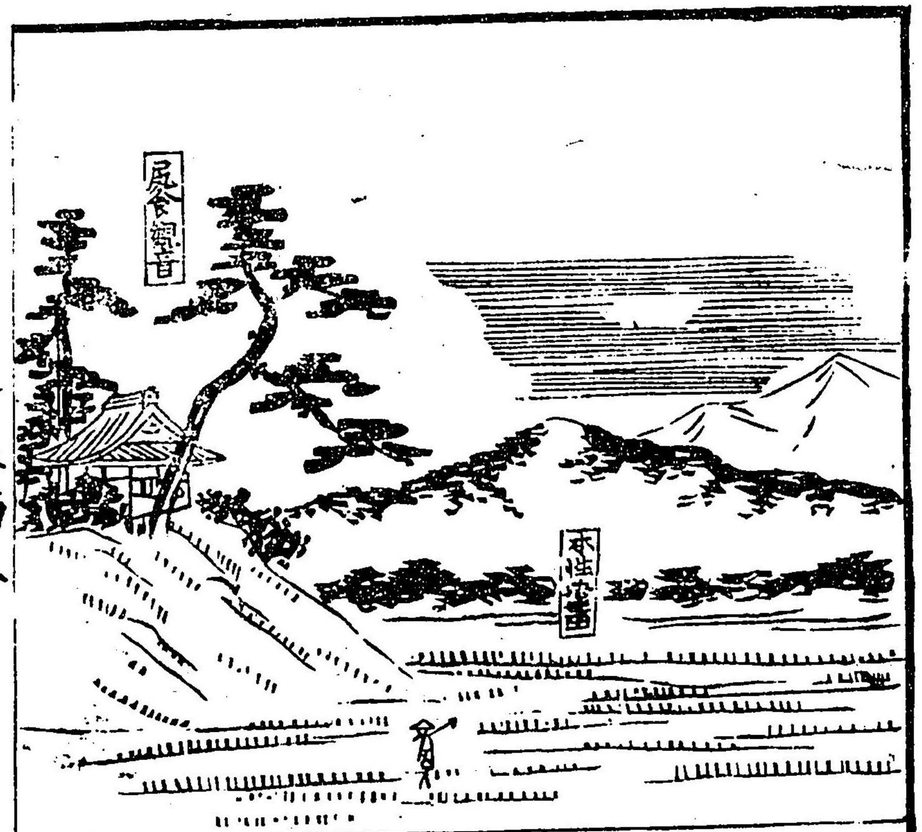


安置せ。此等像皆毛の長尺ゑ物数しのべ
ば出去り○悪い屋ざ。べ出ろ舌。ゑと底ゑ
ゑ。ゑ寺ゑ峯岡ざ。かゑきて
利ゑハ移く。各大酒之升五合と淵ゑる寄り○古ゑ
に。各邸の。吹ゑ坊のゑ

以ゑ行ゑ。酒と同ゑゑ寄ゑと之升。と云ゑる名所也
又ゑ寄ゑ八寺中の坊舎形ゑゑ。各遍歩を揭ざ
整く寄り○よゑん恍○ゑゑん恍○泥岡恍○又ゑ
枚ゑ一彩の赤寺ゑり。皆奥山奥蘭寺といふ是ハ番寺
の執事ゑるより○境内廣く。しゑ出ゑく整花の地。
登歩の踊ゑく綾ふ祈ゑり○太平猿○ゑざ巻墨餅
い名物ゑり○小間物名世都ゑ名ゑ。○底ぬゑり井戸ハ○
不可簡谷へ続くと云伝へ○ぬゑ古老採底ぬゑの谷ゑ



身體に出るなり。ほんに
石ゝ等等よといふ事
なり○牛蛙連ひ田○
食ひ倒れ田新田を過て
○燒餅坂へかゝる○青ッ
相の木食し。濁り酒で
も清酒でも冷でもよろ
ら敢一杯いと。茶ごんで



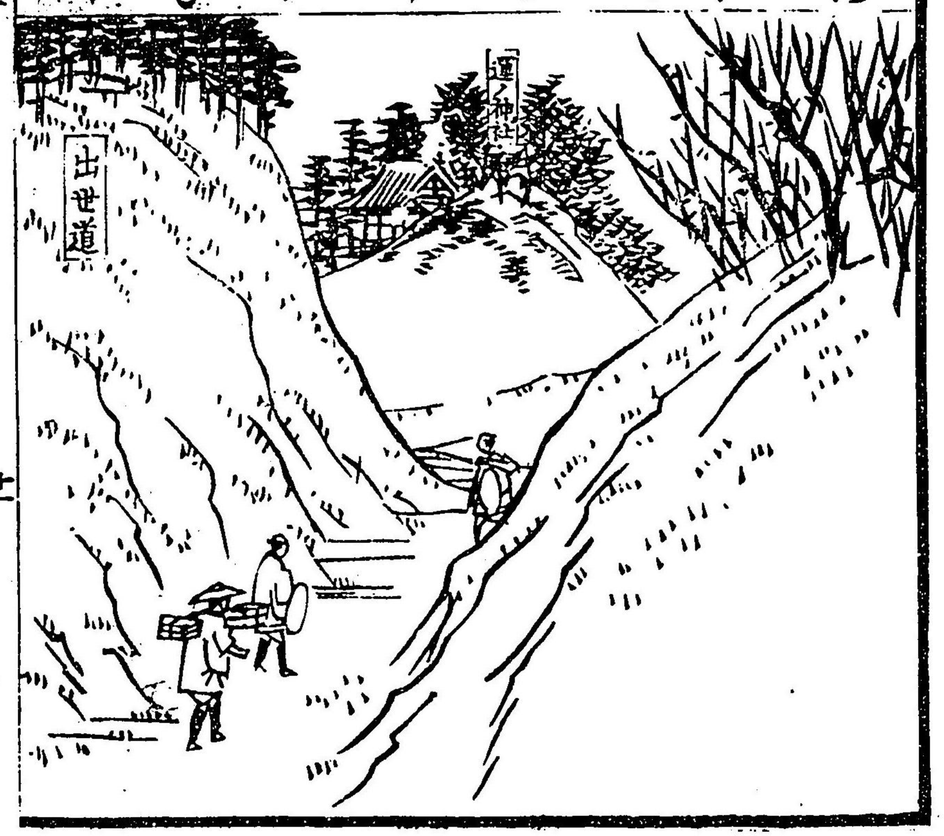
ぐるくひつ多ある立
場茶屋なり○引負縄
手○不背尾の松樹り
見ゆる○是より屋食ひ
觀音堂へ参るなり。この
歌者堂の傍に○今坂
茶かん物見の松あり盗
賊上戸村へ往道なり○

付上せ業を爰ゐ入せ
ゆ事〇欠蔵川此川了
〇出奔あり初は亀の子
弦めくがぶくと酒を飲
う。後ゆ仕様とも
く。呑ちくてく
ゆへに接井戸の三年
まで不了者なり三度

功を積く遂り欠蔵川へ出く。出奔と化ちゆふ〇美元
不写の蔵〇るの身へ念仏堂この京紀家記〇耳ハる面ハ
情く祝て活せ。扨せのもくくもすくくとくと云る
所あり〇志摩より〇勢南町〇四里切通し〇義絶の杜ホ
を過く御く〇食宮村へ出る。南村の結宮ハ〇偽さ稲荷
様あり。諸人此宮へまくちで祭く目お受繰るゆへ乃名
彩り。是より角にて去やく波村り出く正ちらぶ
ふたび新熊御道へ出る。南社の美殿を蒙

○禁酒事より此の家を
結ぶく通り家に
ぞうこの来繰は麦酒
○味淋酒もこの呑べうら
べ○この据は稲荷社
神社へ参詣して。更に
他意を起さべ祝用心振
らべ。生真りゆけら

出世の道へ以て屋しこの
途筋も余程の難所に
て十二分の苦辛を憚へ
志のべ為へざるべ難こと
○運の神社此辺へ
祈ち以て喰吸する山を
ゆ。ぞるべんを用ひ
て木の根岩角りて



法華ぐれ谷間にふるさとぶ法このぐりぬ道長
ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜

第八驛

平泉関道。知足の神社来清道○知足宿○色御所
を美見の関。帰来の門より○酒御所に猿さいなりさ
より。道の傍を過ぐ砂知足の神社来清所に出る山道
行りを。幸枕越をの時代紙載を足ぐ雑
義なり。仰上を絶壁刀して削るがごとし。直下

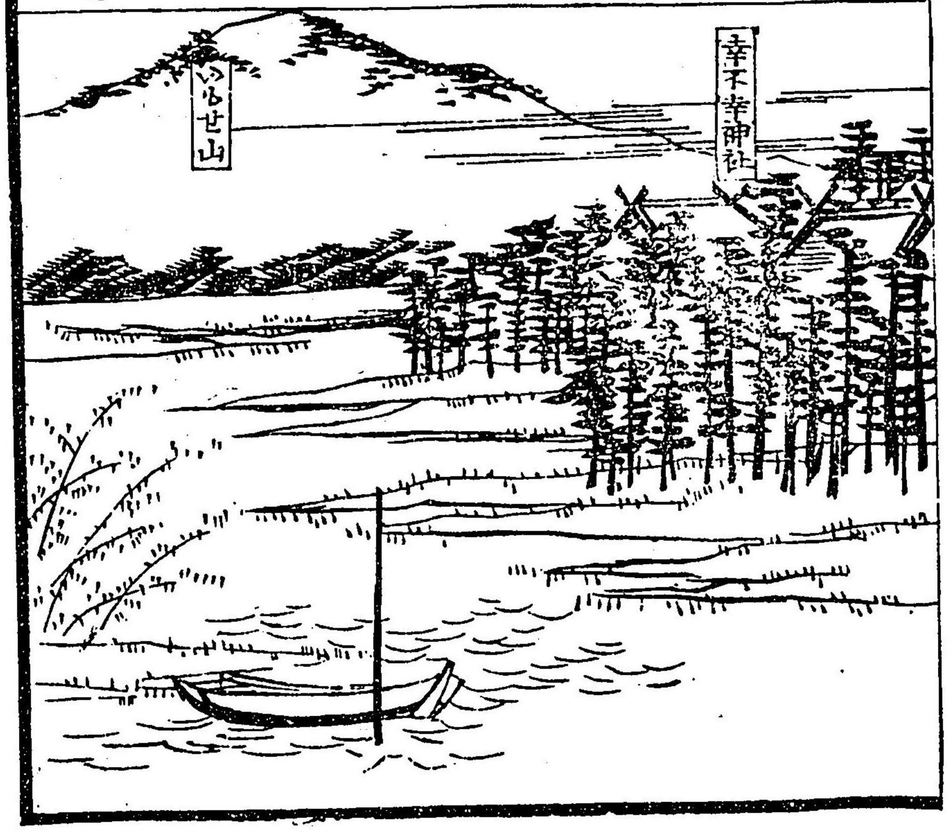
青潭盤よりも青く。羊腸なる九十九折を荊蘇
足を踏まず。実冗なる孤峯を雲代出く見るごと
ろう。巷寺の猪野しも山巷の木魂り動きく
ふ悪しく。山猪樹上より時法をする一房の
穂ひ代猪さむ。折るの風ア巷。さらねぶて
藤なるの折きるの多るり。折り数嶮を下り完
望○運の神の祠ある以ぬ新潟。寧に幸枕の嶽の
宮寺折り代。伊くぬ蜀の積道をかくぬりに

ける屋てのうば。西洋のダウロス山とも名づけて高くあらじと思ふ。開通第一等のる山なり。○運の神の祠○張岳坂なり。古家にかんうん法なる懸魚がうかがひむこの方に見

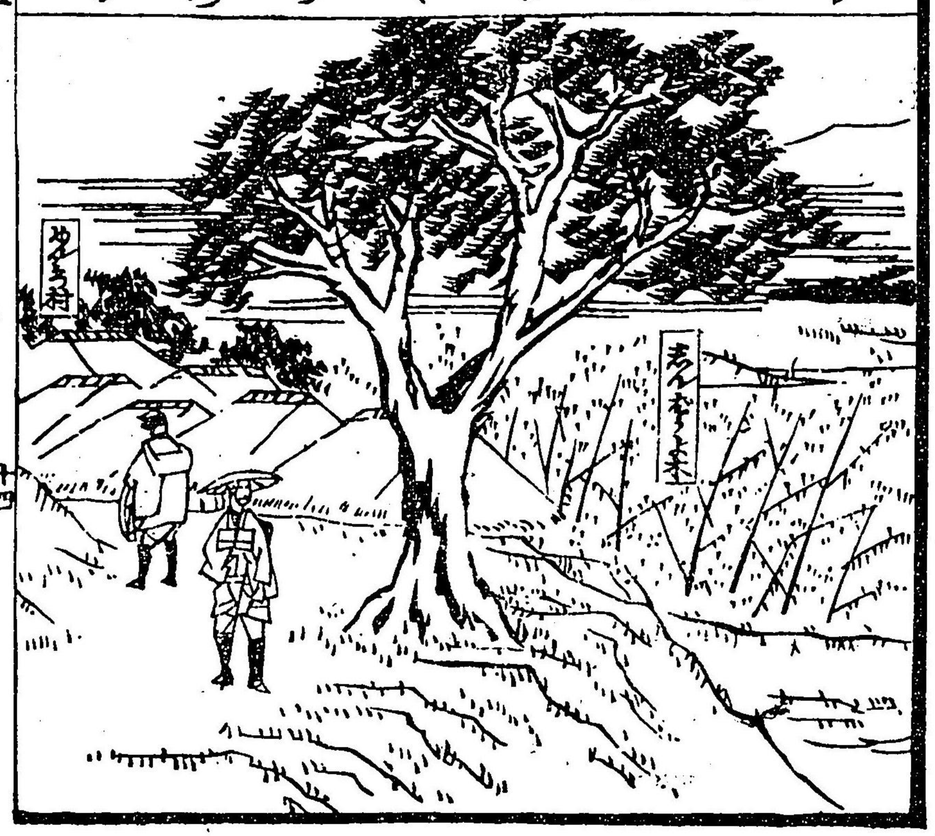
かんうんなるが加ふ○融通岩○此岩加せ木なり○名記村當地に帯岩しく三文の値乃あるなり。名記十間まで。名記村の人家十間より出るものなり。一日の間よ

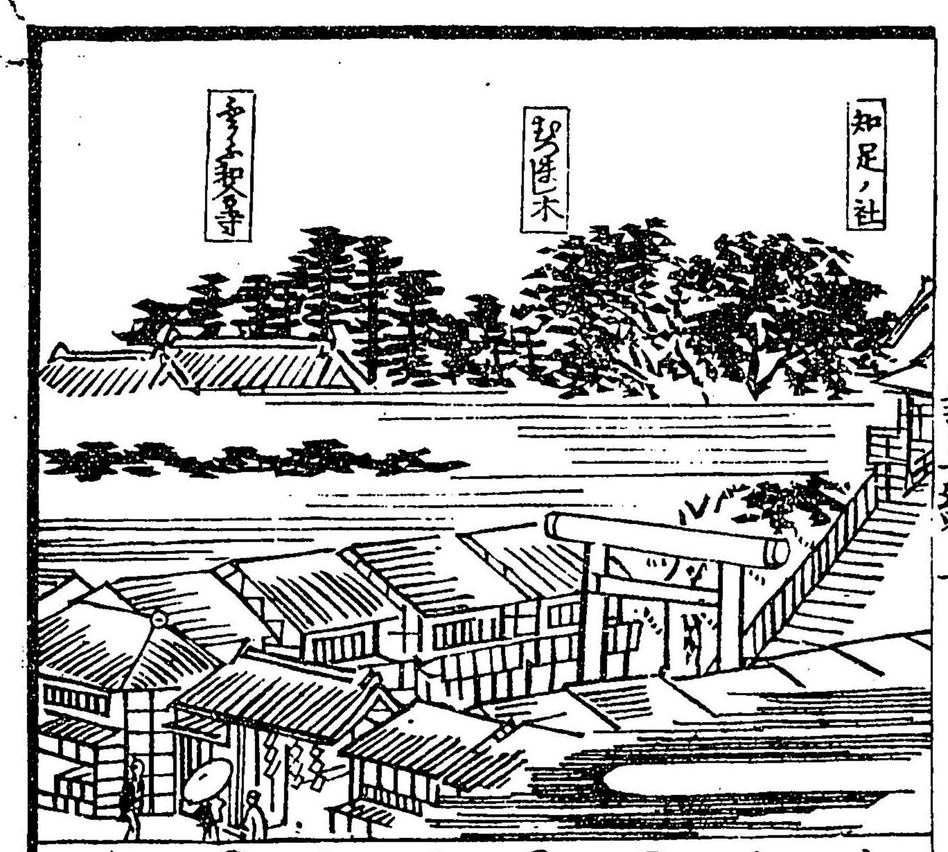
四時の損益あり。総じてバ一日ホ法をもつてあべ五日法損益あり。人生一生五十年を安お損益見積りなる。年間五年の出入となるなり。別五年の長生なり。

○幸挖跡木。此木並て



り彩へ〜○幸不幸法神社あり古色より○管寛村○綿密むらを尋ねく○妹脊山へ〜る○妹背山女庭別に四く○ふに〜への神代のむら〜山跡の。國を郡乃ちゞ発るくふとせの





市ヶ瀬。山ノ社と唱ひしは出羽山の名の移り

○夫婦山和合寺あり

○路辺に睡眠木実

○一分の立場茶や○

名物正直蕎麦これあり

○俗説山知足の神社。

その名の由来を師に

問ふ

只清潔を上とせり。然

是ゆる分の極ハ巖窟

り石ゼとなる法なり

為せり。

第九驛

悪徒遠玄道破産宿

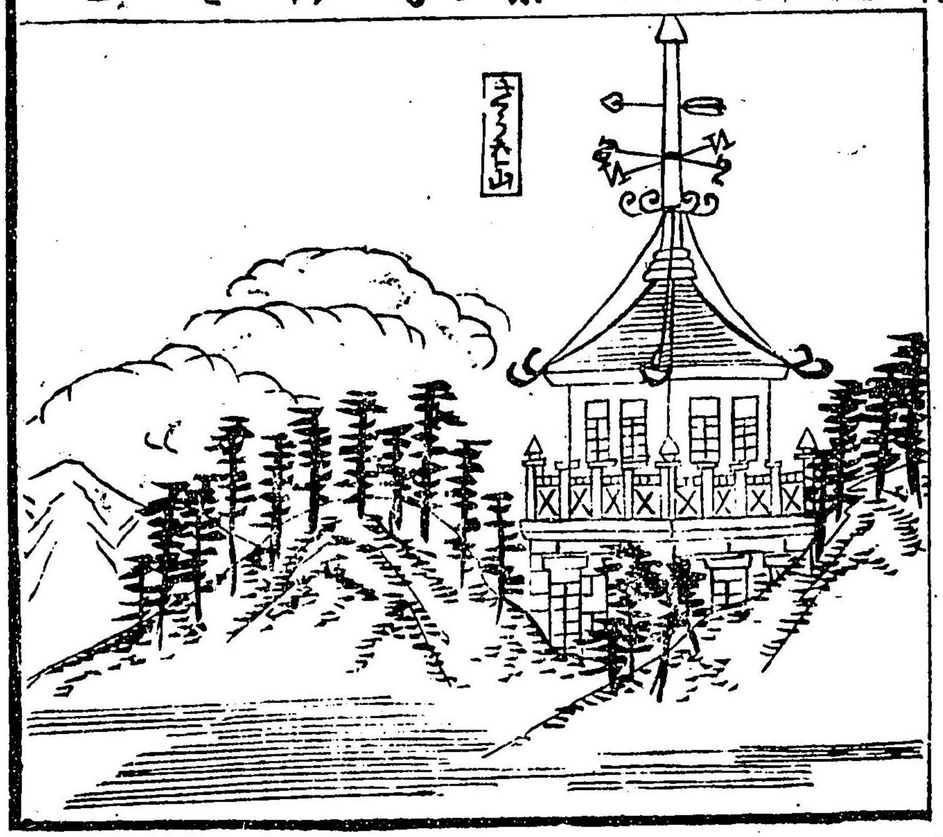
○路地郷道中第一の極

悪ク。尋常の旅

人をいるるものなれば。
をり結ぶて此道り
逃げ入るものは。死人と
なる藝妓の魔所は
て。ものを魔ものをきいたるの
○死此御道を寺院
今なを有るこがてらだ。
明日は雑のるぞあるぞと

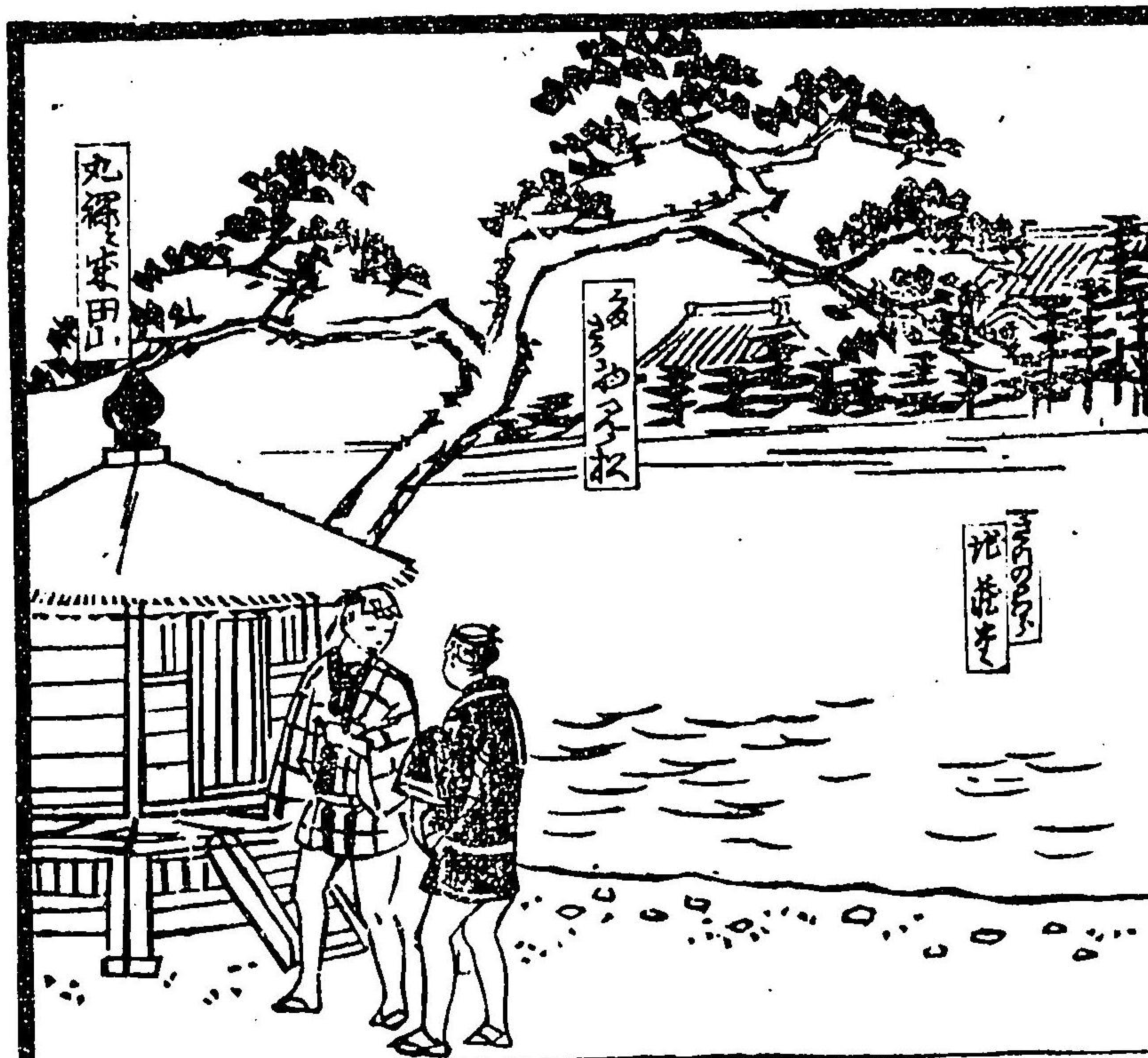
ゆふ甚しき地獄なり○又路地をくぐる小物屋あり
て。人殺流る魔所なるべし。ゆゆ恐ろしきこの辺りあり
○樗蒲ゝ雨形ものゝ一めんに燃いぐ。後絵と
しなる人ゝ中よ現出る。わ主も安積の絃堂昌あり
と名乗出ゆへど。刀の鍔音ふいあゝで物の寄チャラく
と鳴く写へ。愈激突物罵詈怒言号怒の丈高く脊に
倶利伽羅龍の。刺青しなる大の男あるべ。緋縅色の
振袖を十文字よ縛り。水藍染のゆぬぐひを面ひざまに

ぎ高し。鄰巷しる勇士
孔あり。あるへ越栗城之の
宇。又之一ツ竈ありて。在
し昔の姿ちるべし。碁
と戦しし猪頭と奉ひ。
相坊山より鄰しる松の陰
ハ。琴と弾じて仲達と
走らせる孫汁の趣と



撲し。猪気川の鼓しちる水青ハ貴敵とのふして西陣
一同り鬨声と挙しハ。赤壁土り百万の大敵と驚ま
ちる。彩やと怪しむ。ぞり以と物語ます。くなんどる
おろこの山り○相坊山之の山。こ山ゆ之嶮阻ちる也。ちて に
登りて奥の院まで徒弓ぐる者ちる也。多分ハ苔
このぐり足と纏へら也。樹の根に躓き家と失ひ
と果ひとのみ。ちてのしハ○ゆる政山り かぎりと敬と云
歌ちる。述ひの雲りの里欠迎り走里ちる山也。

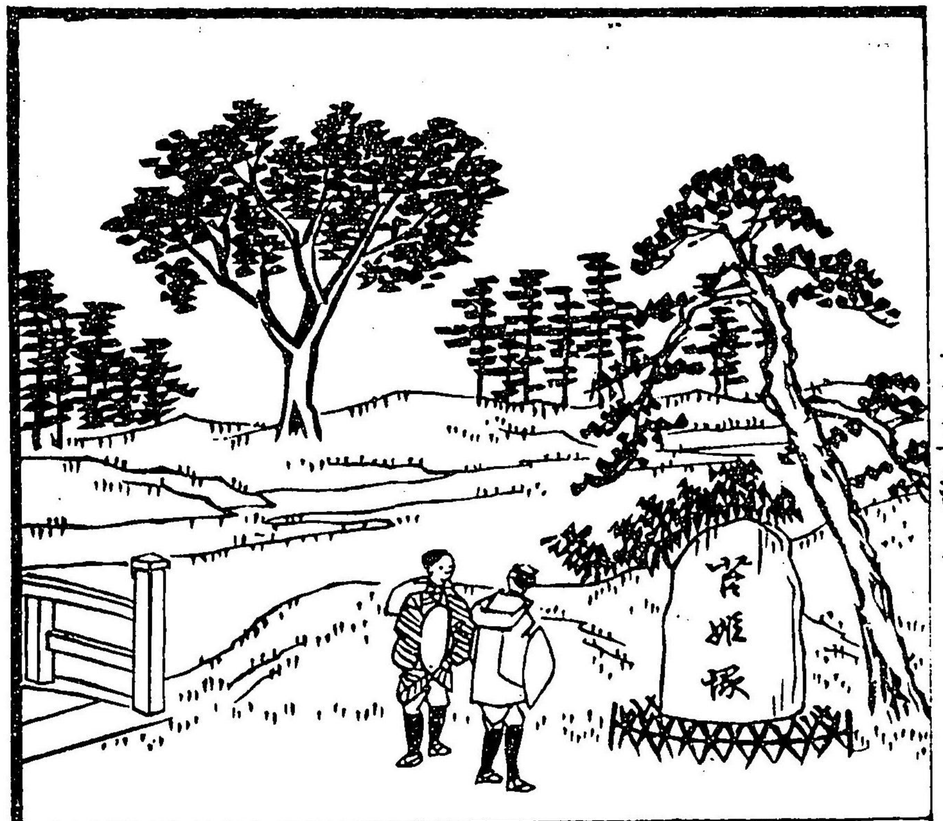
彼雲獄より速になり。
閻魔が庭のうちなる巳目
ともいふべし。牙ど爪と
ありてのかゝる毛のあり
○熊坂長半物見の松
あり○塞の河原地蔵堂
あり。宮攫の国箱根山
ありといへども大なかず



なりつゝも路銭を守る
ものなり○赤ッ国○錫ヶ崎
あやうの田地多し路銀
ハ馬なあれども牛ハあ
し○丸裸の村田山ハ
非道明王を安置し大判
あり。不断ハ動かず
いふ境内に○糠味噌汁

けちまん大明神の宮。
當寺へ門前〜寺と呼。
一文字〜と云ふ義なり。
○本堂の右乃方り○
五重乃塔あり西東
ぐ以ふ。どろぼう。東京ぐ
云ふ。後よりたぐなるけ
ちめ〜建立之由招より

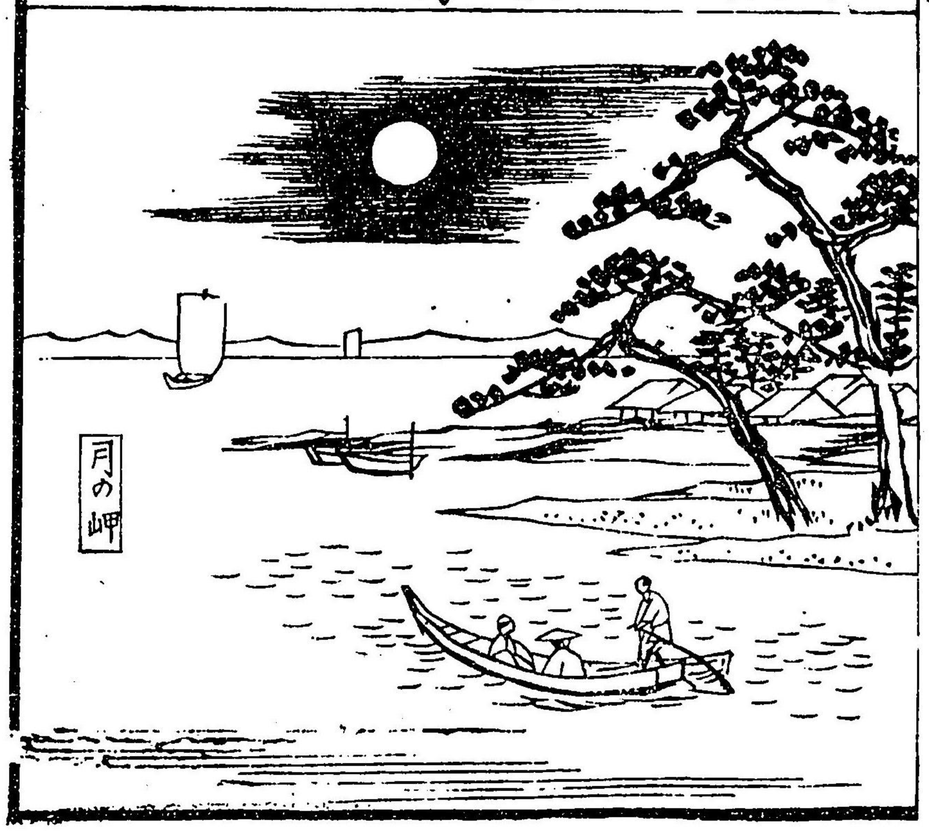
○下る道へ出て○雷りめ
ぐろつ死山へかゝる。當山へ
登る岩ち北着有也。右方南
より出る猪ぐりと記あす
づ〜○ちゝぶの歳○日
寺〜の社前へ行。この
日ぐ〜乃りへ參詣多
く樓ぐ重成子所有。



○貴文神の祠。當社八文
暦げんをたくぞ。いぎょうぞ
乃神と奉る將軍夢ゆる
遊を乃つまりて吉凶ぐめ。
吳雜をうけぬの吳強あ
らるまり○七面堂あり。
ゆ結ぶん八建立あり。
年号ら備紗ぞん乃

病稀遊りて。ゆうを
損者ら但嘗ぐちゅり○
上ケ下版○言利者ら
ゆ吳強ぐ病ちゅり
ゆり。利のちゅうをく
ゆ〜ちゅ三面。ちゅ金の
ゆ〜ちゅ〜○利言用
八ちゅ〜〜ちゅんと

いる者。安心すること沢
苦労せず古往今の物
西寺の夢覚さうな
多くしく。むつ苦
昭の恵りありしと。
いい法さん名所。是
より淀急ぎの○貨利
の浸。此辺り獲



桃太郎代記　かちかく山　猫の道行
花咲爺い　猿かに合戦　舌切すず免
鉢づきの源八　姫んぶり義太　朝ぶの物語
かぐや山物ち

銅版小本

右の小本ハ是まで世ニ行はれたる諸家よりの稿
個様く修飾を入れ且つ文も改めて新規よりして
刻切より仕立て発製せし人情本の孫方への
堅牢なる巳不ハ是を以て紹介す

安政弐拾五編

明治十五年九月廿日出版御届
同　年十月発兌

編輯人　平氏　渡邊益
出版人　京橋区南槇町二番地　木村文三郎
日本橋区馬喰町二丁目一番地

大賣捌人

東京通油町　水野慶次郎
同　西国吉川町　松木平吉
越後三條　浅間傳賊門
同　長岡　松田周平
同　葛塚　弦巻七十郎
甲府三日町　松本米兵衛
箱館地藏町　木下清次郎
信州松本　高美甚左衛門